大東亞戰爭御詔勅の御喚發……一億國民ひとしく襟を正して、米英撃ちてしやまむの火の玉が日本全土をひと舐めに吹き舐めて行つたのである。

この日の朝、この高原のさゝやかな村々も、未明から湧き立ち上つたのだ。

兒童は勿論のこと、在郷軍人、青壯年團、婦人會等々、各團體々々の必勝祈願參拜が團旗を先頭に、次々に村道に滿ち溢れ、村の代表者達幾人かは、諏訪市在の神宮寺村に鎭座ます、官幣大社諏訪大明神様へ祈願參拜に繰り出したのである。

大平部落、松目部落……又夫々各部落民は氏神様の大山神社、諏訪神社へ、足腰の立たない者はさておいて一人殘らず必勝祈願の參拜を行つたのだ。

古老達は、夫々各部落の行屋（公會堂をそれに當ててゐる）に立て籠つて、米英撃滅、大東亞戰爭必勝、等の紙片を結へつけた注連繩を庭に張りめぐらし、念佛講をひらいて日本必勝と皇軍の武運長久を祈願した。いくつか混つた太い濁聲の念佛の聲と鐘の音が、深更まで行屋から霜夜の夜空にひびいて居た。

――この感激と決意の立ち向ふところ、それは强兵を續々と送り出し、たとへ一粒の米、一粒

の麥、一枚の桑の葉でも余計に穫り上げてお國にさゝげる、農村にあつてはそれ以外に何の御奉公の道があらう。――難航に難航を重ねてゐた大平の貯水池問題も、部落民の新しい自覺から、忽ちに呆氣にとられるほどの容易さで解決してしまつたのであつた。

十二月十一日の夜、大平の公會堂で、兩部落民の全員が參集して、日出度く手打となつたのである。

「大平の衆、儂等はお前エさま方の池の水を貰ふくせに、勝手な熱を吹き上げてゐてなえ、何とも申譯ありましねえ。何分末永く池の水を惠んでやつておくんなあ。その代り、今度の擴張工事には大平の衆には唐鍬一本持ち出さしましねえ、松目で全部堀り起しますだで」

と、松目の區長の作太が云ひ出せば、大平の溜りでは、區長の權左衞門老人の口を俟たず、各自てんでんに、

「松目の區長さま、相手は水だわな、山の神様が惠んで下さるもんだに、儂等だけで一人占めにするなんて勿體ねえだわい」

「松目だけで工事をするなんて、そんな馬鹿な眞似はさしておかれましねえ」

と、喧々囂々たる態を呈して――その翌朝の未明、大平の貯水池のまはりには兩部落民全員が、女も居れば、老人も居た、まつ黒く蝟集したのだつた。眞白い、寸余の霜柱をふみ碎いて、一鍬々々土にぶち込むその唐鍬には、憎い玉黍ッ毛の奴等の頭のどてつぺんへ鍬をぶち込んでやるその力と氣魄とがこもつてゐたのだ。かくして僅々十日間、千坪以上の貯水池の擴張工事が瞬く間に見事に完成してしまつたのであつた。

――名取村長はまつ先に、その事を云つたのである。兩部落のこの美しい共同作業と心のあり か、これこそ信州幾百ケ町村の中でも、佐久の大日向村と前後して率先二百一戸の開拓村を滿洲の野へ送り出してゐる榮譽ある富士見村を再び振起させる導火線であり、原動力でなければならないのだ。

村長は、ポツリポツリとした語調で、再び語りつづけた。

「さて皆さま、おいそがしい處を、かうして皆さまから集つてもらひましたのは、他でもござりましねえ。儂は、あの貯水池の擴張工事を兩部落手をつねえで仲よく、さうして立派に成し遂げて下された皆さまから、もう一つ、この富士見村、いんにや諏訪郡下、伊那郡下……他のどこの

村にも魁けて、他村の模範となる大仕事を一つやらかしてもらひてえだを……」

名取村長は意地惡く、ここで又プツリと語を切つてしまつたのである。

他村の範となる、といふ一語に、ボウと自負心をあきらかに示した目をぶす黝い顏の奥から輝かせ、

「村長さま、いつていぜんてい何事でござりますなえ?」

と言つた氣配が、摺膝となつて村長の前へッッッと詰めよせたのだ。

「皆さま、今朝の新聞でもラジオでも御承知のやうに、クアラ、クアラ……」

と、村長は口籠つて、傍らの矢崎にクアラルムブールと囁かれると、ニヤリと白髯の顎で笑つて、

「クアラルムブールも、我將兵の正義の鐵槌の前には刄が立たず、遂に昨日陷落いたしました。皆樣とて御同樣と思ひます、儂は臀の下がムズ〳〵として居ても立つても居れましねえ。この足腰が自由じぜいになるのなら、あいつ等毛唐の奴等の蒼い目玉へ、肥後守の草刈鎌の先を片ッ端からぶち込んでやりてえだを……」

聲にこそ出さなかつたが、ドッと喊聲の渦が一座から捲き上つたのだ。

この高原は、一月ともなれば、毎夜零下十度を越す夜の連續であつた。首ッ玉にまいた、黄色く變色しかかつた手拭の端でシュンと鼻の頭をこすり上げて、五十人の目は異様な輝きを示して居た。

「やつちめえ」

「ぶち込んでやらざあ」

と、惻り知れない力が自制もならず、漲り猛つてくるのだ。

「皆さま、前線に立つて銃劍を持てねえ儂等は、今いつてえ何をしたらよからず。……增産、增産、これより他にありましねえ。半かけの米粒、一粒の麥、一枚の桑の葉、この滿身の力と精神とで少しでも余計につくり上げて御國に御奉公する、これより他には道はござりますめえ……」

高原の寒冷な月が、いつか公會堂の屋根の上へ廻つてきて、その破れた障子の穴から幾本か鋭い光りが差し込んだ。四圍は肌寒くなるほどの靜寂さであつた。その靜寂さに曳き入れられたやうに、一座は聲一つ、咳一つ起さなかつた。

この無言の靜けさの中にこそ、百姓の眞の姿が存するのだ。語らないことは、實行以外に一物ももたないことの證左であつた。

「皆さま、この基秀さが昨年十一月、滿洲から態々歸エつてこられましたのは、一つにこのことのためでござります。……」

村長の右隣りに、國民服の膝をキチリと揃へて坐つた矢崎の顏へ、皆の目が一樣に新しく濺がれたのである。

「樋口團長はじめ、二百一戸の開拓村の皆さまは、我富士見村の隆盛、增産、これを念ずるより他には何もありましねえ。基秀さは、その皆さまの意を受けて、儂等の聲援に、應援に、王家屯から遙々とやつて來られましたのだに。そして今、皆さまも御承知のやうに村の經濟更生主事として、この村の更生に寢食を忘れてとんで歩いて下さります、……」

矢崎は面映くなつてきて、目をつぶつてしまつたのであつた。いや、その瞑目は、遙か幾百里、海を渡り山を越え、王家屯の同志のなつかしい同志の顏の一つ一つへ、その思ひを馳せたのだ。

この前、貯水池の擴張工事の紛爭が目出度く納り、いよ〳〵兩部落の手打となつた時、パチパチパチ、パチパチパチとひびくその拍手の音の中で、その時にも彼は今夜と同じやうにその兩眼を固くつぶつてゐたではないか。フイと暗がりへ素向けた彼の鼻柱には、ポタ〳〵と二三滴、押へもならない涙がはふりおちてゐたのである。……

「さて、皆さま、いよ〳〵今夜の問題エを皆さまから聞いてもらひます。んだが、儂がこれを云ひ出したら、あの村長の野郎何てことを云ひ出しただえ、と、皆さまきつと眉を剛立ててお怒りなさるに違ひありましねえ。しかし、これはどうしてもやらねばならねえ、富士見十ケ部落に魁けて、皆さま兩部落の衆からどうでもやつてもらひてえと思ひます。いんにや、儂から皆さまに手を突いてお願ひするだをを……」

次第に熱を帶びてきた名取村長の聲は、はげしく震へ出して居た。之を措いて何があらう……一途に突き進まうとする人のはげしい意慾であつた。

矢崎は、この瞬間ハッと胸がつぶれたのだ。農にたづさはる者の、土と取組む者の到達する感激であつた。……

「つまり、皆さまの田なり畑なり、それをお互エに交換したり、分合したりして貰ひてえだわな。……田が一枚エは彦ン田にあるかと思へば、一枚エは窪田にある。桑畑が栗平に一枚エあるかと思へば、一枚エは日向だ。代掻きは勿論のこと、田植、草取り、水見……畑だつて同じだわな。あつちこつちと飛び廻る道中の時間……今、人手の足りねえこの時に、それはどれほど大かい手間損をしてゐるだか……」

長い村長の話の間中の沈默を破つて、初めて五十の口々が一齊に囁き出したのだ。あつちで一塊り、こつちで一塊り、もう村長の立つてゐることなぞ無視して、ざわめきが二百十日の嵐のやうに起り、煙管の雁首を灰皿代りのカンカラのふちでぶつ叩くもの、鼻を新聞紙の分厚いのでかみ出す者……。

矢崎は、ッと立ち上つた。

「皆さま、今の村長さまのお話の通り、耕地の交換分合……と云つて、これは決して皆さまの田畑の所有權まですつかり換えてしまうと云ふんぢや更々ございましねえ。ただ耕作權だけでありますだに、このことはよーく考エて貰ひてえでございます。單に耕作權の交換分合と申しまして

も、勿論地味の上下があります、田畑の格がございます、道順の便不便がございます。……しかし、これらはみんな各部落々々で委員を幾人かづつ出してもらつて、それで依古最負の無えやうに公平に定めて貰ひましよ……」

そこで矢崎は、五十人の村人の顏色を、目の玉をいち時にグツと見据ゑたのである。何故か足元がふらついて、ヂイツと立つては居れぬやうな衝動であつた。熱ばんだ彼の頭の中を――樋口團長が走り、同志の聲が聞え、妻の夜なべ姿が浮び、子供の遊び聲が耳にひびき……矢崎は眼先が次第にぼやけてきて何もかも見えなくなり、唯全身が止めどなく震へ出したのを意識したのであつた。

高原のさゝやかな部落の、古ぼけた公會堂の大圍爐裡には落葉松の枯枝が眞火にバリ〳〵と音立てて燃え、飽くまでも冴えかへつた山國の冬の月が、白一色、白銀の野面を、山肌を、白樺林……を照し出し、この高原の冬の夜は寂として聲一つなく、次第々々に更けて行つた。（終り）

昭和十七年冬、拓士の村、長野縣諏訪郡富士見村は遂に耕地の交換分合を斷行した。大平、松

目兩部落の烽火を合圖に、今や御射山新田、木ノ間……と村内各部落は一齊に之に倣ひ、そしてその波紋は諏訪郡下に、伊那に、筑摩郡に……刻々はげしい震度で及びつつあるのである。昭和十七年の田植、これには岡谷市から二十五人の女子青年團員が共同炊事、託兒の奉仕部隊として甲斐々々しく繰り出して來た。諏訪湖畔の有賀村の地籍を借りて共同播種した稻苗は、その山深い山ふところの村の水田にスク〳〵と育ち上つたのである。貯水池、農道の擴張、開田・緬羊の飼育、新農具の使用、……と、大平、松目兩部落を先導とした、高原の村富士見村の目覺しい躍進の姿こそ、榮譽ある拓士の村たるに全くふさはしい、頼もしい姿ではないか。

あとがき

童話集や中間物としては二三あつたが、創作集としては「佐代女」以來二冊目の刊行である。紙不足の折、私のやうな新人の作の出版を快く引受けて下すつた文松堂社長山形氏はじめ皆樣の御好意に心から謝する次第である。

農民作家を熱望して、當初中篇物を二三書いたのであつたが、その後日本民謠のもつ堪らない良さに魅せられて、そちらへ足を向けたところ、いつか知らぬ間に十年間を送つてしまつて居た今は、これからの全生を農民作家としての仕事に專念したい熱望でいつぱいである。

「耕地分合以前」「じゆんさい」この二篇はじつくりと腰を落着けて、それ〴〵長篇として書き上げてみたかつた作品であつた。

「耕地分合以前」は私の第二の故郷である信州諏訪郡北山村に程近い富士見村の昨今を書いたのだが、文學的な盛り上りの欲しい上から創意を入れたため、些少ではあるが事實とは少し違つた場面もある。人物、名前等にしても同じである。猶この作品については、多忙な中を私のために

特に貴い時間を割いて紹介の勞をとつて下すつた古畑實農事指導員、竝に鄉土史家三井喜愛兩氏に玆で厚く御禮を申し上げる次第である。

「濱ぐみの實」は材を私の亡母の故鄉にとつた作品である。種々難點があると思ふが、しかし私としてはこれは多年是非とも一度書き上げたいと念じてゐた作品だけに、讀者皆樣の苟責なき御批判の前に唯頭を垂れる以外には何物もない。

昭和十八年九月

著者識す

發行承認番號イ一五〇四四五號
昭和十八年九月三日印刷
昭和十八年九月八日發行　（初版五、〇〇〇部）

著者略歴

本名佐藤平一　明治四十年新潟縣生、昭和四年三月富山高等學校理科2卒。現在東京都教育局勤務

濱ぐみの實

定價　金一圓五〇錢
特別行爲稅相當額　一〇錢
賣價　金一圓六〇錢

著作者　佐藤洋二
發行者　先生友恒　東京都京橋區銀座七ノ四
印刷者　佐藤磨　東京都小石川區柳町二六　印協會員番號東東1349番
發行所　文松堂書店　東京都京橋區銀座七ノ四　出版會會員番號12806番　電話銀座三二七四・五三五一　振替東京八〇四七六番
配給所　日本出版配給株式會社　東京都神田區淡路町二ノ九

438
203

終

賣價(税込)一圓六〇錢